

幼児の表現活動における指導法について
— COVID-19下における3つの視点による表現活動の検証より —

杉山 祐子 ・ 黒木 佑香 ・ 武井 由香

Study on The Point about Teaching in Children's Expression Activities.
— Verification from three viewpoints of expression activities during the COVID-19 —

Yuko SUGIYAMA, Yuka KUROKI, and Yuka TAKEI

研究紀要 第24号 別刷 (2023年3月)
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

Reprinted from THE JOURNAL of
CHUBU GAKUIN UNIVERSITY, CHUBU GAKUIN COLLEGE
No.24 : 117 – 124 (March 2023)
SEKI, GIFU, JAPAN

幼児の表現活動における指導法について

— COVID-19下における3つの視点による表現活動の検証より —

Study on The Point about Teaching in Children's Expression Activities.
— Verification from three viewpoints of expression activities during the COVID-19 —

杉山 祐子¹⁾・黒木 佑香²⁾・武井 由香²⁾
Yuko SUGIYAMA, Yuka KUROKI, and Yuka TAKEI

抄録：保育現場の表現活動では、幼児の自己表現を楽しむ気持ちや仲間意識が育まれ、就学に向けた基礎力の土台作りとされている。しかし2020年度はCOVID-19の感染防止対策として、これまでにない行動制約が保育現場にも課せられた。その状況にあっても、現場の教諭は幼児の表現活動を停止するわけにはいかないと考えた。そこで、COVID-19下でも実施可能な表現活動の指導の視点を3つ設定した。その視点の下、COVID-19の影響下であった2年間の表現活動を検証した。指導者の工夫として「フラフープ」を活用した。「フラフープ」は、幼児が自主的に“ソーシャルディスタンス”を取る効果があった。さらに、幼児の表現力を豊かにし、上手になりたいという意欲を引き出す効果も見られた。また保護者の検証として質問紙調査を行った結果、当日の成果と自宅での子どもの様子を聞くことができ、今後の指導法の改善点の発見につなぐことができた。

キーワード：幼児、表現活動、3つの視点、指導法、COVID-19

I. はじめに

保育・教育現場では、発表会、作品展やその他の行事において集団での表現活動が多く存在する。『幼稚園教育要領』⁷⁾、『保育所保育指針』⁴⁾、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』⁸⁾では、領域「表現」の内容として、『自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。』と明記されている。また、兼平は、今回の幼稚園指導要領と学習指導要領において、幼児教育から小学校教育へ連続した保育者の支援の重要性を指摘している¹⁾。それは、保育者と幼児、幼児同士がコミュニケーションをとりながら協働的に力を合わせて学んでいく保育であるとも述べている。また、表現活動は子ども同士の協働が育まれる場としても有意義である。練習を進めることで、特に音楽の表現活動では、他者と触れ合ううちに肯定的に自己が受け止められ、他者を受け止める体験となり、人とかわる力を育むことにもつながるとの報告がある³⁾。音楽にはリズムや速度、音域や調性によって心情的印象がある程度共通性を有している。これは幼児同士にも共通性が見られることが多い。そのため、言葉でのやりとりがなくても、お互いの心情が共通していることが楽しいと感じ、自分の表現に自信を得て生き生きと自己を表出する

ことができる。しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の流行により、会話、歌や身体との接触は感染の原因とされた。保育・教育現場でもCOVID-19感染予防の観点から、様々な活動に制限が加えられた。そもそも、全国的に登園・登校さえ困難になる状況となっていた。矢島は「幼児向け舞台表現の制作や実施が大きく制約される事態が続いているが、～中略～準備期間を短縮し、密集する運動や組み合ったり接触したりする運動を別の運動に代替するとともに、規模の縮小や来場者の限定など、あらゆる場面で感染防止に配慮して開催することが、今後の幼児向け舞台表現の制作と上演で参考にできそうな方法が示されている。」と新しい開催方法の模索について述べている⁶⁾。同じような考えとして、現場の教諭たちも、表現活動を感染予防に配慮しながら、できる限り表現の魅力を味わってほしいと強く思っていた。COVID-19による制限を、代替や工夫によってクリアし、安全を確保した中で、表現活動を行うことは、指導の重要点である。

COVID-19感染防止対策は、三密の回避とされた。その中で特に困難となることは、幼児が他児と自分との「距離」を常に保って活動することである。幼児は、活動開始直後は整然と並ぶことができる。しかし、活動中には幼児同士が近寄って触れてしまう場合が多い。そのた

1) 幼児教育学科 2) 中部学院大学・中部学院大学短期大学部附属桐が丘幼稚園

め、幼児でも分かり易い距離感を示す方法を考えていく必要がある。また、感染予防に徹するあまり、幼児の表現力や自主性を抑制してしまうことは、活動の意義が減少してしまうであろう。このように、これまで経験のない状況下で表現活動をするためには、皆が意識すべき視点を新たに整備し、安心して活動することが望まれる。しかし、全国的に困難さを抱えている保育現場と共有できる活動の視点の整備は、まだ報告されていない。

II. 目的

そこで、COVID-19下であっても、保育現場で表現活動が可能になるための視点を設定し、その視点の下で表現活動を行い、その成果を検証することにした。

III. 方法

本研究は COVID-19 の影響が最も深刻であった2020年度に行った幼稚園の年長児クラスで指導した表現活動と、翌2021年度の表現活動の振り返りである。

1. COVID-19に対応した2020年度の表現活動

表現活動を行った期間は、2020年9月1日～12月31日の4か月間である。活動を担当したのは、年長児クラス担任教諭2名と音楽指導を担当する短期大学教員1名の計3名である。活動場所はA幼稚園である。研究の協力者は、A幼稚園年長児44名とその保護者である。

活動内容は、A幼稚園での年間行事の①運動会の発表(10月1日)と②クリスマス祝会の発表(12月10日)の2回である。これらの活動の評価は、指導者から見た幼児の行動や意欲の変化と、年長児保護者への質問紙調査(12月21日～25日に実施)である。質問紙調査は、「フラフープ」を活用した2020年度の運動会とクリスマス祝会の2つの活動への評価である。評価方法は、「良かった点」と「良くなかった、もしくは改善したほうがよい点」への自由記述の記入を分析することとした(表1)。

表1 2020年度の表現活動に対する保護者へのアンケート調査内容

質問1	運動会での「フラフープ」を使った発表の感想をお聞かせください。
	良かった点:
	良くなかった、もしくは改善したほうがよい点:
質問2	クリスマス祝会での「フラフープ」を使った発表の感想をお聞かせください。
	良かった点:
	良くなかった、もしくは改善したほうがよい点:

2. 2021年度のA幼稚園における表現活動

翌2021年度の表現活動については、2020年度に引き続き2年間年長児の担当教諭2名による、活動の全体的振

り返りとした。振り返りは2022年8月19日にA幼稚園の教室で行った。振り返りの方法は、2021年度の活動の様子を3つの視点に当てはめ、意見を述べ合った逐語録を文字化し、まとめた。

IV. 倫理的配慮

本研究に関して、中部学院大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得た(C20-0030)。

V. 結果と考察

1. COVID-19に対応した2020年度の表現活動

1) 表現活動における3つの視点の設定

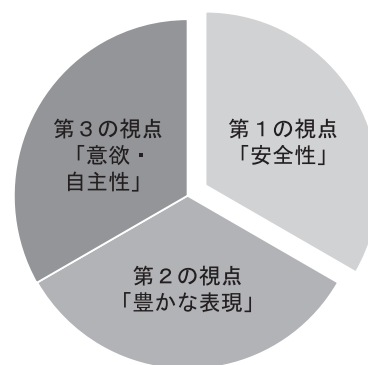


図1 幼児の表現活動における指導上の3つの視点

2020年度、COVID-19発生当初はウイルスに対して解明が十分ではなく、情報が錯綜していた。その中でも、感染の主な原因は飛沫・接触とされ、「三密」回避の生活様式が求められていた(日本環境感染学会、新型コロナウイルス感染症の現状と対策2020)。それに伴い、保育・幼稚園現場では歌うことやふれあい遊びは感染伝播とされ注意を要した。そこで、表現活動の指導に当たり、これまでの表現活動で目指す姿にCOVID-19感染防止の視点を加えた「指導上の3つの視点」を設定した(図1)。第1の視点は「安全性」としての感染予防、第2の視点は「豊かな表現」を目指すこと、第3の視点は「幼児たちの意欲や自主性」を大切にすることとした。

2) 3つの視点に基づく表現活動の道具の選定

1) で定めた3つの視点に基づき表現活動を考案するためには、道具の工夫が必要と考えた。そこで、「フラフープ」を活用することにした。「フラフープ」は保育現場にあそび道具として置いてあることが多く、普段から幼児にとって馴染みがある。大きさの割に軽く、幼児が扱いやすいことと、体に当たっても怪我が少ないことである。

「フラフープ」の良さは、第1の視点の「安全性」が確保できる点である。素材はプラスチックのため、洗浄や消毒に耐えられることや、何度も使うことに適している。さらに、「フラフープ」は円形(内径60cm)のため、

幼児が中に入って両手で持つと前後左右の距離が保ち易い。以上の理由から、「フラフープ」の活用は第1の視点に叶っていると判断した。

次に第2の視点である「豊かな表現」の道具としても魅力がある。「フラフープ」は5色あり、演出の工夫ができると推測する。表現活動において道具の提供という物的支援を行うことは、学習者の自主性や想像力育成に効果があると報告されていることから⁷⁾、第2の視点に貢献することが可能である。

また、指導により幼児が「フラフープ」に興味を持つことができれば、自主性を育むことができるであろう。指導者が幼児に対し、活動に意欲的に取り組む支援を工夫することで、第3の視点への有効性が期待される。

以上の仮説の下、幼児の表現活動の道具として「フラフープ」を活用することとした。

3) 活動における工夫について

3)-1 第1の視点について

第1の視点に基づく活動の工夫点について報告する。表現活動に際して、幼児一人ひとり自分の使う「フラフープ」を固有化し、使用後は消毒することでCOVID-19感染に注意した。表現活動は他児と触れ合うことや道具を共有することから、従来の方法ではCOVID-19感染のリスクが発生する。活動によりクラスターが発生すれば、幼児や家族の健康を侵害することになりかねない。指導に当たり、幼児の様子にこれまで以上に注意を払い、今まで経験をしたことが無い判断が必要となることもないと想定して臨んだ。

2020年度に行った「フラフープ」を活用した表現活動のうち、①運動会の発表は、「スマイル(新沢としひこ詞、中川ひろたか曲)」の曲に合わせ、「フラフープ」を使った“なわとび”、“2人でくぐる”、“少人数グループ行動”、“全員行動”を設定して発表した(図2・図3)。感染予防のため、声を発する場面を最小限にした。指導する際の声かけについて、通常は大きな声で号令をかけたり、指示を出していたが、今回はジェスチャーやカードを用いて、視覚的な指示を中心とした。練習過程では、幼児に自分が持っている「フラフープ」の周辺が感染予防のための仲間との距離(ソーシャルディスタンス)となることを伝え、接触を最小限にして活動を行った。また、練習は暑い時期であった。マスク着用のため、通常以上に休憩を入れるようにした。②クリスマス祝会では、歌を歌えない代替案として、運動会で発表した演目を、大ホールの舞台上にアレンジして発表した(図4)。運動会の会場と違い、会場の狭さによる密集度の高さや風通しの面から、感染が懸念された。その懸念に対しては、練習を短く区切り、空気の入替えを行った。②クリスマス祝会のステージでは、雑壇を使用した。舞台の床が板であることから、安全性と音に配慮し「フラフープ」なわとびは行わなかった。このように、室内での表現活動では、屋外の表現活動との違いを意識して、感染対策を

新たに取った。更に、道具の扱いにも配慮した。②クリスマス祝会の発表は、他の発表演目と連続して行うことから、必要な楽器や小道具が追加され配置されている。それらの扱いにも注意を払って活動を考案した。①、②ともに、練習は日常の園活動の中で行った。幼児は、「フラフープ」の扱いに慣れてきたことから、表現活動へのゆとりが散見された。

以上のように、①、②の活動において感染予防を図ることができ、COVID-19感染症の発生は無かった。感染予防は、幼児に強制する方法ではなく、制限の中でも工夫することをみんなで楽しむ雰囲気を大切にできたと振り返る。

3)-2 第2の視点について

第2の視点について、以下の幼児の姿が見られた。1人1つの「フラフープ」を丸いフレームに見立て、幼児の笑顔が浮き立つ場面があった。また“少人数グループ行動”や“全員行動”では、丸い形状と5色を生かし花を形作るなど、全員で協力して美しさを表現することができた。練習の過程では、「フラフープ」の持ち方を幼児自身が試行錯誤して工夫している場面があった。きれいな形ができた時は、満足げな表情が見られた。以上の幼児の様子から、「フラフープ」は幼児の表現力を引き立たす役割を果たすことができたと考えられる。課題点として、ぶつかると「ガチャッ」と音がすることで、舞台では演出効果に影響し、工夫の余地が残った。



図2 運動会の活動



図3 運動会の活動2



図4 ②クリスマス祝会の練習風景



図5 表現活動の練習風景

3)-3 第3の視点について

第3の視点について、以下の幼児の姿が見られた。“なわとび”は、初めはできない幼児が多かったが、幼児の何度も練習する姿から、「できるようになりたい。」という意欲が伝わってきた。自由あそびの時間に自主的に練習する幼児もおり、最終的に全員ができるようになった。それを運動会で発表できたことは、達成感が得られたと見られる。また、“2人でくぐる”では、言葉で合図しなくてもお互いに協力する姿があった。幼児たちは、演

技ができるようになるまで練習をしたり、教え合う姿があった。うまくできるようになると、観客に観てもらえる喜びを感じている様子であった。また、自分の道具であるという意識を持ち大切に扱う姿から、責任感も育まれたとみられる。課題点としては、幼児の成長の違いへの指導側の対応であった。身長や体力にまだ差がある年齢であり、「フラフープ」がワンサイズでは体力的に若干難しい幼児もいる。しかし、一人ひとり自分ができるようになりたいという向上心を持って練習し、諦めてしまう幼児はいなかった。

以上の幼児の様子から、COVID-19による活動の制限がある中では、幼児にとって以前にはない困難さもあったと推察する。しかし、練習過程において、全幼児に共通する「フラフープ」を介して、幼児は自分や仲間と共通意識を感じながら頑張る姿勢が見られた(図5)。指導者として、幼児一人ひとりの力を見極めながら、できるようになったことを認め、意欲を喚起する指導法が大切と感じた。

2. 保護者の評価

幼児の保護者へ「アンケート」のその回答結果から表現活動に関する評価を実施し、まとめた。保護者44名中30名の回答があり、回収率は68%であった。

表2 保護者の回答による視点別の記述数 n=30

		感染予防	表現の豊かさ	自主性や意欲
成果	①運動会	6	21	10
	②クリスマス祝会	4	14	8
課題	①運動会	1	5	1
	②クリスマス祝会	7	14	0

質問1・2とも「良かった点(成果)」と「良くなかった、もしくは改善をしたほうが良い点(課題)」と2つの項目で自由記述の回答を得た。1名ずつの回答の原文を、設定した指導上の3つの視点別に分類し、キーワードを中心とした短文に加工して掲載している(資料1及び2)。複数の視点について回答が述べられている場合は、複数回答とみなし、各視点に切り分けた。各視点での記述内容数を集計した結果を表2に示す。保護者からの回答は、第2の視点に関する記述が成果と課題を合わせて54件と最も多かった。第2の視点「表現の豊かさ」の成果として、「フラフープ」の斬新さや、カラフルさ、フォーメーションの見栄えの良さが多く述べられていた。運動会では「フラフープ」を活用した表現活動に評価が得られたと考えられる。また、②クリスマス祝会では、「歌の代替案」として、「フラフープ」の活動は止むなきと認知された。しかし、②クリスマス祝会に対する課題の意見が最も多く挙げた。「2回目」・「クリスマス祝会らしさが薄い」が主な理由であった。これは運動会のイメージがそのままであったことによる表現の発展が少な

かったという反省点である。表現方法を会の雰囲気に合わせる工夫が必要であった。

第1の視点に関する回答では、「ソーシャルディスタンス」に関する内容が主で、安心感を得ることができた。しかし、②クリスマス祝会では、課題としての回答7件が「舞台の狭さ」であった。安全面で、幼児のけがに対する不安を感じたと思われる。運動会と両方を鑑賞したうえでの意見として、ステージ上での安全な動きの工夫がより必要であった。

第3の視点に関する回答では、「楽しそう」、「頑張っている姿」、「楽しく練習していた」、「できるようになった」、「みんなで協力していた」の感想が述べられていた。これは、発表を観た感想に加え、家庭で幼児から園の話聞いていた感想や、幼児の頑張る姿から述べられたと考えられる。COVID-19下の制限の中であっても、幼児の楽しむ姿や成長を感じたという回答と受け止めることができた。課題は1件のみであり、「動きが不安そう」とあった。これは、言葉ではなく見本を見せる指導法を繰り返すべきであったとの反省点と捉えられる。

以上、保護者からCOVID-19下での表現活動に関する意見から、感染は大変心配であるが、予防措置を行った上で、我が子の活動や成長を対面で観た手ごたえが伝わってきた。COVID-19以前は当たり前に行ってきた表現活動を中止とせず、道具や演出方法を工夫して披露できたことは、保護者と共に幼児の成長を喜ぶ機会となった。年長児は、5歳児幼児期の終わりまでに育ててほしい「10の姿」(文部科学省、2015)にあるように、就学までの幼児の成長を培う最も重要な時期に当たる。この時期に、体を動かすことや気持ちを表出すること、他児と協力していくことを止めることは大きな損失である。これまでも大切にしてきた「豊かな表現」や「幼児の自主性や意欲」を損なうことなく活動を実施するためには、知恵を絞り、意欲をもって指導をする姿勢だとわかった。時には社会状況に対して慎重になるあまり、表現を委縮させてしまうこともあろう。保護者からの指摘にあるよう、安全を重視するだけでなく場面に合わせて表現の可能性を求めていく努力が、指導において重要な点と改めて認識した。

今回、このような保護者の意見を活動の評価に加えたことで、客観的な見解を加えることができた。これは本研究に限らず、保護者の意見を活用し、園活動をより良くする方法の可能性が見られた。

3. 2021年度におけるA幼稚園での表現活動

翌2021年度は、COVID-19の解明が進み、感染防止の取り組みも定着してきた。しかし依然として保育現場での表現活動には三密回避による制限があった。しかし、2020年の表現活動における3つの視点による検証を踏まえて、幼児の表現活動に取り組んだ。2020年度と同じ指導者2名が年長児を担当したことから、2021年度の表現活動の指導について振り返り考察する。

1) 第1の視点による取り組み

①運動会において、屋外での活動は密にならない工夫が可能であることを2020年度の活動で体験した。2021年度は「バルーン」を活用して演技した。これまで1つのバルーンに50名以上の幼児が関わったが、感染予防として「バルーン」を2個に増やし、関わる人数を半分にして幼児同士の“ソーシャルディスタンス”を確保することができた。ただし、1つの「バルーン」の人数を減らしたことで動きの負担が増えるため、怪我には細心の注意を払った。また、競技の指導方法も2020年度の経験に基づき、あらかじめ幼児との決まり事を作って対応した。号令のサインや、技のネーミングを一緒に考え決定したことで、短く伝わりやすくなった。②クリスマス祝会においては、「フラフープ」がステージ上で課題が多かった点を考慮し、大きな道具は使わず、2020年度は行えなかった合奏を再開した。ステージ上に楽器の位置を固定し、感染予防に努めた。練習では、消毒が可能な楽器のみ使った。少人数単位での練習とし、感染予防に努めた。さらに、2021年度は歌も再開した。幼児に飛沫がかからないようマウスシールドを着用し、前を向いて歌うことにより、ホールに歌声が戻った。しかしCOVID-19下での合奏は新たな課題解決が必要であった。“ソーシャルディスタンス”を保つことで、お互いの音が聴きづらく、一体感を得るための指導が重要であった。幼児には「耳を澄ましてよく聴く」指導や、カード等の活用を行ったが、今後さらに適切な指導法を考えていきたい。

2) 第2の視点による取り組み

①運動会でのCOVID-19感染予防対策で、数を2つにしたバルーンの活動は、結果的に迫力ある表現となった。扱う人数が半減しても、年長児として力を出し切り頑張る姿が伝わった演技となった。協力して体を動かすことでバルーンが大きくふくらむと、幼児の達成感が感じられた。

②クリスマス祝会では、歌は全面的に解禁になったわけではないが、これまで当たり前に行っていた歌声が聴けたことで、職員や保護者の感動を誘った。合奏は、楽器の種類を減らしたことで、シンプルさが表出され、幼児の表現を安定して引き出す活動となった。

3) 第3の視点による取り組み

運動会の「バルーン」は2020年度できなかった種目であったため、幼児は発表できることに嬉しさがあふれていた。自分たちで技の名前を考えて、親しみを持って演技した。②クリスマス祝会でも、歌うことを制限されていた経験から、歌うことの喜びや満足感が伝わってきた。練習以外でも自ら歌詞カードをじっと見ている姿があった。合奏も「耳を澄ましてよく聴く」指導により、集中して聴いている様子であった。楽器の音の迫力を自分たちも楽しんでた。

以上、指導者として、COVID-19下、2年間年長児を担当した立場として、幼児の様子を述べた。2021年度で

事情が変化しても、2020年度での取り組みで得た成果や課題は活動の土台となった。2年連続して年長児を担当することで、改めて表現活動で大切にしなければならないことへの意識が明確になり、指導法にも生かされていると感じている。

VI. おわりに

COVID-19感染予防の中での表現活動は、先行きが見えず、実施中止も視野にあったが、幼児たちの成長の機会を逃すことは保育・教育の損失である。そこで、幼児の表現活動を継続するために、3つの視点を設定し、その視点に基づき2年間取り組んだ。その結果、実施するための視点を持ち可能性を模索することで、幼児の自主性を尊重する表現活動が実現した。今回得た知見をもとに幼児の表現活動を行うことで、幼児の頑張りや指導者の工夫、保護者の理解により、幼児の成長を見届けることができることが示唆された。

COVID-19下での体験により、今後不測の事態が発生した場合も、諦めないで工夫する重要性が認識された。また、表現活動を充実させるためには、幼児に行動の制限を強要するのではなく、幼児自らの気づきを促すことであると捉えられる。また、活動の振り返りは園内にとどまらず、保護者の意見を取り込むことで、指導者では届かない所の指摘を得ることができた。このような連携は改めて大切だと認識した。

幼児の表現活動は今回の2つの場面にとどまらず、広範囲で行われている。今後、様々な活動に対して幼児の成長を促す視点を設けその成果を検討することは、改善の道筋となる可能性が見られた。しかし、これらの活動の検討は、担当の指導者だけでは不十分であろう。危機管理としては、園長、主任教諭への相談を綿密に行い、園全体での情報共有や協体制の構築が重要であった。COVID-19以外でも未経験の事象が今後発生する可能性はある。今回は3つの視点に基づく表現活動の検証であった。今後は幼児の成長を支援するための視点を指導者同士が共通認識をより持つことができるようにしていく必要がある。そのために、設定と検証を積み重ねていくことで体系化を模索していく。

引用文献

- 1) 兼平友子：就学後教育における総合的な学び。青森中央短期大学研究紀要, 33, 7-14, 2020
- 2) 杉山祐子：創造的パフォーマンス形成の支援に関する研究。中部学院大学・中部学院大学短期大学部紀要, 22, 11-20, 2021
- 3) 中川華那、片山美香：音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究。岡山大学教師教育開発センター紀要, 第5号, 73-82, 2015

- 4) 保育所保育指針, フレーベル館, 2017
 5) 文部科学省: 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について. 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 22-24, 2010
 6) 矢島毅昌: 保育・幼児教育・初等教育の教員養成教育における「子ども向け舞台表現」制作の意義. 島根県立大学松江キャンパス研究紀要, 第60号, 11-20, 2021
 7) 幼稚園教育要領. フレーベル館, 2017
 8) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領. フレーベル館, 2017

資料1 保護者の回答「良かった点」に対する3つの視点による分類結果「成果について」			
回答者	第1の視点	第2の視点	第3の視点
■成果について			
①運動会			
1		物と体を使って表現	皆と合わせて演技
2			出来なかったことが、練習の機会があり、少しできるようになり
3		チーム1つになれる一体感	
4	距離を取る	見栄えた。	
5		フープがきれいに重なった	たくさん練習したんだろう
6		見栄えが良かった とてもきれい	
7	お互いの距離を取る		
8		広い場が使える時なので適している	運動をみんなが経験する
9			できるようになったこと
10			がんばって練習し、できるようになった
11		いろんな隊形をとって 外でしかできない動き	
12		一体感があり良かった	
13		フラフープをいろいろな使い方 見ていて楽しかった	
14		新しい取り組み ワクワク	
15	程良い距離を保つこと		子供も楽しく練習できて楽しそうな姿を見ることができた
16	間隔をとってやってもらって	みんなでタイミングを合わせてできていた	
17		初めて見られた事は良かった	
18		今までにない発表 目新しく、見ているほうも楽しかった	
19		みんなまとまっていて上手	
20		いろんな色 きれい いろんな動作	
21		息が合っている とてもよかった。	
22		新鮮	楽しそう
23	友達との距離が保てれた		ペアと協力
24			団結力が生まれた

25	自然にソーシャルディスタンスをとる	穏やかな雰囲気演技	
26		普段しない動き	
27		フラフープを動かしやすいそう 可愛く綺麗	
28		フラフープを使ってしかできないこと	
②クリスマス会			
1		音を感じている	
2			運動会からの成長を見た
3			歌が歌えないが、フラフープ楽しそう
4		手話とフープの組み合わせ	
5			2度目で自信を持ってできた
6	ソーシャルディスタンスを保っていた		
7		歌が歌えないので仕方ない	
8		ステージ映え	
9			楽しんで
10		カラフル きれい	
11	合唱ができない中、できることを探してくれた	大きく移動が上手	
12		可愛い	個々でがんばっていた姿
13	程良い距離を保つ		楽しく練習できた 楽しそう
14		上手にできていた	
15		舞台上で見ごたえ	2度目の発表だったので練習しやすかった
16		珍しさで新鮮	
17		斬新	
18	室内なので少し危ないかな	楽しかった	
19		演技が大きく見えた すてき	
20			楽しそう
21		音楽中心でも邪魔になることない	

資料2 保護者の回答「良くなかった、もしくは改善点について」に対する3つの視点による分類結果			
回答者	第1の視点	第2の視点	第3の視点
■課題について			
①運動会			
1			不安そう
2		もっと盛り上がりがあるとよい	
3		顔が見難い	
4	隣の子とぶつかりそう		
5		動きが少ない ワクワク感がない	
6		もっと園庭を広く使って	
7		運動会ぼさ 見づらい	
②クリスマス祝会			
5		狭い 見づらかった	
6		クリスマスらしさが無い	
7		「フラフープ」を使う意味が分からない	
8		重なると見づらい	
9		感動が薄くなる	
10		メリハリに欠ける	
11	狭い	違う演目も見たい	
12		2回目	
13	狭い	クリスマスらしい装飾を期待	
15	狭い		
16		クリスマスに合わない	
17		クリスマスに合わない	
18		狭い 単調	
19	壇上はヒヤヒヤした		
20		2回同じだった	
21	狭い		
22		クリスマスらしさを出すべき	